

Essay

Sapiarc.com

2014年8月8日(2014-4)

広島・長崎への原爆投下についての if(もしも)

今年の8月6日は広島に原爆が投下されてから69年目に当たり、例年どおり慰霊の式典が行われて、安倍首相らに加えて、キャロライン・ケネディ大使も出席した。あいにく雨が降っていたので、参会者全員が透明のビニール製合羽を着ている写真が新聞に出ていた。

原爆が広島に投下された後の状況については、たくさんの記録等が出版されている。記録文学作品として、とくに高い評価を受けているのは、井伏鱒二著「黒い雨」(新潮社、1966年10月刊)だろう。この本の、いわば種本となった、重松静馬著「重松日記」(筑摩書房、2001年5月刊)もある。井伏鱒二は直接被爆したわけではないから、この種本がなければ、「黒い雨」を書くことはできなかつただろう。

私は、「黒い雨」が出版されたころ、アメリカに滞在していたが、ある友人(故人)が親切に送ってくれたので、比較的早い時期に読むことができた。これは、井伏鱒二の代表作と言っても良いものではないかと思う。重松静馬の「日記」は、被爆者である重松が、自分が体験したことを、被爆から1箇月ほど後に書いたものであり、物書きが専門でない人がよくこれだけのものを書いたものだと思える。井伏氏は、重松氏が見せてもらって、共著の形で「黒い雨」を出版することを重松氏に申し出たが、重松氏は辞退したそうだ。

「重松日記」の存在は、「黒い雨」の出版後、良く知られていたが、著者の重松氏的意思により、彼の生存中には出版されることはなかった。

重松氏の没後長い時間が経ってから、相馬正一氏の実験によって、「重松日記」はようやく日の目を見ることになった。私は、この本が2001年に出版された直後に購入したが、書棚に入れてだけで、読んでいなかった。今になって、それを取り出して、毎日寝る前に少しずつ読んでいます。

作家が書いた「黒い雨」と比べると、「重松日記」は決して読み易いものではない。広島に地理に詳しくない私には、巻末に付されている地図がなければ、どこのことが書かれているのか、まったくわからないだろう。しかし、原爆投下があった8月6日から数日間の惨状は実に詳しく書かれていて、これを記録として残しておこうとした重松氏の意図は十分に伝わって来る。8月6日のことについて、次のようなことも書かれている。

『風向きが変わるのか、焔が吹きまわられて、中程がむくれ上がり、丸い火炎や球状が中天に上がり、中心が割れて口を開き乍ら吹き上げてゆく。怖しさ、凄さは感じない。押しつけられる様でもあり、自失していたと云うか、威圧されたとでも云ってもいいのだろう。(怖しさとか、凄さとか、凄惨とか、恐怖とか云う感じをもつのは、平常の意識によるもので、大なる衝撃を受けると、人間の感受量より大きいので、感覚内に恐怖も凄惨も連続してはなく、時々感受した部分が想い浮んで来るに過ぎない。)』

8月9日の長崎への原爆投下後のことについても、多数の書物が出版されている。被爆した医師の永井隆氏が残された多くの書物がよく知られているが、そのうちで私の手元にあるのは「この子を残して」だ（中央出版社、1976年第2版第1刷、初版の出版はもつとずっと早いはずだ）。この本は、私が2007年11月に長崎市永井隆記念館を見学したとき、その場で買い求めたものだ。永井隆氏のご長男の永井誠一氏の著書「長崎の鐘はほほえむ — 残された兄妹の記録」（女子パウロ会、1969年初版刊）は、隆氏の書かれたものの続きになるもので、心を打つものだ。

こういう本を手取る度に、私には、あるif（もしも）が頭をもたげてくる。それは、アメリカ海軍の軍艦インディアナポリスに関することだ。この軍艦が、広島と長崎に投下された原爆をアメリカ本土からテニアン島に運んだこと（運び込んだのは1945年7月26日）、そして、その任務を終えてから、テニアン島からグアム島を経て、レイテ島に航行している途中、7月30日に日本海軍の潜水艦によって撃沈されたことは、日本ではよく知られているとは思えないし、話題になることもない。

この撃沈が、もしも、インディアナポリスがアメリカ本土からテニアン島に着く前に起きていれば、どうなっただろうというのが、私のifだ。そうすれば、もちろん原爆の投下はなかったのだ。当時アメリカは広島に投下したウラン爆弾と長崎に投下したプルトニウム爆弾の他に、いくつもの原爆を保有していたわけではなかった。次のものを用意することはできたにせよ、それには相当の時間がかかった。したがって、終戦は遅れただろう。しかし、日本の戦力は既に底をついていたのだから、原爆の投下がなくても戦いを止めるしかなかった。ただ、当時の日本陸軍の中樞は理性を失ったような状況にあったので、本土決戦が行われて、沖縄戦の二の舞が演じられた可能性もある。

原爆の投下が直接の契機となって、8月15日に終戦の勅語が出されたことは間違いないから、原爆の投下はむしろ日米双方の多数の人命

を救ったという、当時からのアメリカ政府の公式見解は間違っていないかもしれない。しかし、原爆という極めて非人道的な兵器を使ったことによって、アメリカは倫理上深い傷を負った。日本は多くの人命を失ったうえ、後遺症に苦しむ人は今でも多い。投下が「良かった」か、という問いには、「正しい」答えはないと思う。ひとつの答えは、そもそもあの戦争はするべきではなかったということになるだろう。この点を問題にすることは歴史を全部見直すことになるから、ここではこれ以上述べない。

インディアナポリスは、1932年11月に就役した古い軍艦で、排水量は約9,800トン、長さ186メートル、横幅20メートルなので、第2次世界大戦当時の軍艦の格付けでは重巡洋艦ということになる。太平洋戦争中は、ずっと日本海軍を相手として戦い、戦争末期には硫黄島や本土への艦砲射撃もした。沖縄戦では第5艦隊の旗艦だったが、1945年3月31日日本陸軍の特攻機がインディアナポリスの艦尾に突入し、燃料タンク付近で爆発し、大きな損傷を与えた。このため、アメリカ本土のメア・アイランド海軍造船所（Mare Island Naval Shipyard、サンフランシスコから約45 kmほど北にあったが、1990年代に閉鎖され、現在は海軍の歴史的施設になっているらしい）にまで戻って、修理が行われた。

修理が終わった直後、インディアナポリスは重要な役目を負わされた。つまり、原爆2発をテニアン島にまで運ぶということだ。途中、真珠湾に寄港して、前述のように7月26日にテニアン島に着き、原爆を降ろした。そこまでは、予定どおりだったが、それからのこの艦の行動に関するアメリカ海軍部内の連絡は極めて不可解なものだった。

テニアン島からグアム島に向かい、7月28日にグアム島からレイテ島に向けて、単独で航行した。護衛の駆逐艦は居なかった。また、潜水艦による攻撃に備えてのジグザグ運動もしていなかった。7月30日になったばかりの夜中に、グアム島とレイテ島とのほぼ中間点で、たまたまその海域にいた日本海軍の潜水艦伊58

(艦長橋本以行小佐、のちに中佐)はインディアナポリスを発見し、魚雷3本を扇状に発射し、その直ぐあとに更に3本を発射した。それら6本のうち、3本(2本とする説もある)がインディアナポリスの右舷に命中し、その1本は艦内の弾薬庫で爆発して、誘爆を起こさせた。このため、大爆発が起き、インディアナポリスは約12分後に沈没した(もっと短時間で沈没したという話もある)。

インディアナポリスには約1,200名の乗員がいた。艦が助かる見込みがないと判断した艦長のチャールズ・B・マクヴェイ大佐(Charles B. McVay, 3rd)は、総員退去(Abandon Ship!)を命じた。私が、この事件のことを知ったのは、1990年代の初めごろだったと思うが、アメリカのどこかの空港の本屋で、面白い読み物を探していたとき、偶然「Abandon Ship!」という題目が目にとまって、それを買って読んだからだ。著者はRichard F. Newcombという人だ。

乗員約1,200名のうち、約300名は艦の沈没時に死亡したが、残りの約900名は海に浮かんで、救助を待った。マクヴェイ艦長もそのひとりだった。しかし、不思議なことに、インディアナポリスが予定どおりにレイテ島の到着しないことは、なかなか気付かれなかった。SOSの無線は1回だけだが発信されており、それは受信されていたにも拘わらず、奇妙なことに適切な措置は取られなかった。多数の乗員が海上で救助を待っていることは、遭難後3日以上も経った8月2日になってからで、哨戒活動を行っていた飛行艇が最初に発見し、それから飛行艇や各種の艦船による救助活動が開始されたが、救助が完了するまでには更に数日を要した。その間に多数の犠牲者が出て、結局救助された生存者は316名だったとされている。

この事件は、戦後になってから、アメリカで大きな問題になり、1945年11月に軍法会議が開かれた。既に日本海軍はなくなっていたので、一市民になっていた橋本以行元海軍中佐も召喚され、証言台に立った。問題とされたことのひとつは、インディアナポリスがジグザグ運動をしていなかったことだが、橋本氏は、ジグザグ

運動をしていたとしても、撃沈は可能だったと証言した。それにも拘わらず、マクヴェイ元艦長は有罪とされた。これによって、マクヴェイ氏には、犠牲者の家族から多数の抗議文が寄せられ続け、結局マクヴェイ氏は1968年に自殺によって生涯を閉じた。ただし、それから長い時間を経て、当時の海軍当局にも問題が多かったことがアメリカ議会で指摘されて、2000年になって、マクベイ元艦長の名誉を回復する文書に当時のクリントン大統領が署名した。

原爆は、日本人に大きな災厄をもたらしたが、少なからぬ数のアメリカ人の生命も奪っていたのである。(おわり)